慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本におけるフランス科学認識論：脱領域の知性のために
Sub Title	Essai sur la réception de l'épistémologie française au Japon: pour l'intelligence extraterritoriale
Author	奥村, 大介(Okumura, Daisuke)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.126 (2011. 3) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	Dans cet article, nous voudrions tenter de faire un dessin de l'histoire de la réception de l´épistémologie française au Japon en nous appuyant en même temps sur la spécificité de la culture japonaise. Cet essai présente le résultat d'une investigation pour élucider comment Japonais ont accepté les pensées des épistemologues français et francophones, comme Gaston Bachelard, Michel Foucault, Georges Canguilhem, François Dagognet, Michel Serres, Jean Starobinski et Pierre-Maxime Schuhl. Egalement nous voudrions esquisser les portraits des philosophes et des écrivains japonais, comme Omodaka Hisayuki, Shibusawa Tatsuhiko, Sakamoto Kenzo, Kanamori Osamu etc., qui étaient tous plus ou moins influencés par les épistémologues français. Entre temps, nous avançons notre hypothèse qui affrme que nous devrions remarquer "le caractère encyclopédique" des épistémologues français, et la place prépondérante qu'ils mettent à "l'imaginaire" en général quand ils construisent leur monde dans la culture scientifique et morale. Ce faisant, nous courons un peu le risque de dire que nous finissons par préparer en un sens une sorte de marche funèbre de l´épisté ologie française ellemême, puisque nous préfé rons finalement modifier lentement l´épistémologie et l'approcher de ce que nous voudrions appeler la culturologie géenérale sur les sciences. Pygmaeos gigantum humeris impositos, plus quam ipsos gigantes videre. 巨人の肩に乗れる矮人は 巨人よりもなお多くを見る (Diego Estella)
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000126-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

日本におけるフランス科学認識論

――脱領域の知性のために――

奥　村　大　介*

Essai sur la réception de l'épistémologie française au Japon: pour l'intelligence extraterritoriale

Daisuke Okumura

Dans cet article, nous voudrions tenter de faire un dessin de l'histoire de la réception de l'épistémologie française au Japon en nous appuyant en même temps sur la spécificité de la culture japonaise. Cet essai présente le résultat d'une investigation pour élucider comment Japonais ont accepté les pensées des épistemologues français et francophones, comme Gaston Bachelard, Michel Foucault, Georges Canguilhem, François Dagognet, Michel Serres, Jean Starobinski et Pierre-Maxime Schuhl. Egalement nous voudrions esquisser les portraits des philosophes et des écrivains japonais, comme Omodaka Hisayuki, Shibusawa Tatsuhiko, Sakamoto Kenzo, Kanamori Osamu etc., qui étaient tous plus ou moins influencés par les épistémologues français. Entre temps, nous avançons notre hypothèse qui affirme que nous devrions remarquer «le caractère encyclopédique» des épistémologues français, et la place prépondérante qu'ils mettent à «l'imaginaire» en général quand ils construisent leur monde dans la culture scientifique et morale. Ce faisant, nous courons un peu le risque de dire que nous finissons par préparer en un sens une sorte de marche funèbre de l'épistémologie française elle-même, puisque nous préférons finalement modifier lentement *l'épistémologie* et l'approcher de ce que nous voudrions appeler *la culturologie* générale sur les sciences.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学），日本学術振興会特別研究員

Pygmaeos gigantum humeris impositos, plus quam ipsos gigantes videre.
巨人の肩に乗れる矮人は，巨人よりもなお多くを見る. (Diego Estella)

はじめに

ベラスケスの絵画《ラス・メニーナス》（1656 年）の細密な読解から学問的認識の歴史を語り始めるミシェル・フーコーの著作『言葉と物』. あるいは，相対性理論をめぐる議論のなかでマラルメの詩を不意に引用するガストン・バシュラールの『新しい科学的精神』. 20 世紀フランスの科学認識論 (épistémologie française) の書物には，このように一種独特な語り口で科学を論じるものが多い．それは認識論（エピステモロジー）という学問領域の与える，どちらかといえば禁欲的で慎ましやかな印象を裏切るような色味と絵画性を備えている．以下では，フランスの科学認識論が日本でどのように受容されたのかを，我が国の思想史・文化史に即して検討し，さらに，このフランス（語圏）独特の文化を今後どのように展開してゆくべきなのかを考えてみたい.

1. フランス科学認識論と英米科学哲学

現代フランスの科学認識論は，個別の科学を歴史的に精査し，そこから哲学的なインプリケーションを抽出しようとする思想的作業として特徴づけられる．それは科学史的な認識論とも，認識論的な科学史とも呼びうるもので，仏語圏では「諸科学の哲学 (philosophie des sciences)」――あるいは「諸科学の歴史と哲学 (histoire et philosophie des sciences)」――と呼ばれることも多い．代表的な論者として，メイエルソン (Emile Meyerson, 1859–1933)，デュエム (Pierre Maurice Marie Duhem, 1861–1916)，ブランシュヴィック (Léon Brunschvicg, 1869–1944)，カヴァイエス (Jean Cavaillès, 1903–44)，ピアジェ (Jean Piaget, 1896–1980)，ガストン・バシュラール (Gaston Bachelard, 1884–1962)，カン

ギレム (Georges Canguilhem, 1904–95)，フーコー (Michel Foucault, 1926–84)，ダゴニェ (François Dagognet, 1924–)，セール (Michel Serres, 1930–) などの名前が挙げられる．あるいは科学史寄りだが，メッツジェ (Hélène Metzger, 1889–1944) やコイレ (Alexandre Koyré, 1892–1964) の名をここに含めることもできよう．注意すべきは，英語圏の philosophy of science や epistemology とフランス語の philosophie des sciences や épistémologie は，語形の上でも学問の性質も類似しているが，両者は微妙に異なる性格をもつということである．英語圏の科学哲学・科学認識論はもともとラッセル (Bertrand Russell, 1872–1970) とヴィットゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889–1951) を決定的な源泉とする論理実証主義に基づくもので，科学の理論的骨格を言語分析・論理学的な手法で精緻に吟味する営みであり，ときに「科学の哲学」であるのみならず，科学の論理と同様の厳密さを備えた「科学的な哲学」という様相をも示す（少なくとも，科学的な哲学であることを目指す）．そして，英米の科学哲学が「科学 (science)」というとき，そこで念頭に置かれているのは個別の諸科学 (les sciences) というよりは，ラテン語の scientia つまり「知識」というほどの意味であり，とくに，個別的・具体的な知識ではなく「知識全般」「知識というもの」であるといってよい．だから，英米の科学哲学は，むろんいくつかの重要な例外[1] はあるのだが，大まかには「知識の哲学」あるいは「分析哲学」と理解して差し支え

[1] たとえばハッキング (Ian Hacking, 1936–) は，その例外の一人．ハッキングはカナダの哲学者，トロント大学教授，2001–06 年はコレージュ・ド・フランス教授を兼任．主著『表現と介入』(*Representing and Intervening*, Cambridge [England]: Cambridge U.P., 1983. 渡辺博訳，産業図書，1986 年)，『偶然を飼いならす』(*The Taming of Chance*, Cambridge [England]: Cambridge U.P., 1990. 石原英樹・重田園江訳，木鐸社，1990 年)，*Mad Travelers: Reflections on the Reality of Transient Mental Illnesses*, Charlottesville [Va.]: U.P. of Virginia, 1998 等．彼の科学哲学は，むしろ本稿で扱うフランス系科学認識論に近い．

ない．これに対し，フランス語圏の科学哲学・科学認識論は，あくまで具体的な個別諸科学とその歴史に密着して思考する．

2. 日本の科学哲学

日本で「科学哲学」という場合，戦後，伝統的に言語分析や論理学をその実質とする英語圏の実証主義的な科学哲学，そして実証主義に対する一種の反動ともいえるやはり英語圏の「新科学哲学」――クーン (Thomas Kuhn, 1922–96)，ファイヤアーベント (Paul Feyerabend, 1924–94) など――を指す場合が多かった[2]．日本において分析哲学系統の科学哲学が本格的に成立したのは 1960 年代と見てよい．当該領域の成立を宣する伝説的な論集『科学時代の哲学』全 3 巻（碧海純一・石本新・大森荘蔵・沢田允茂・吉田夏彦編，培風館）が刊行されたのが 1964 年，専門誌『科学哲学』（日本科学哲学会）の創刊が 1968 年である．以後今日にいたるまで，英米系・分析系の科学哲学は日本の科学哲学研究の中心であり続けている．

これに対して，フランス系科学哲学・科学認識論の移入は日本では著しく遅れていた．1909 年にポアンカレ (Jules-Henri Poincaré, 1854–1912) の『科学と臆説』（大倉書店，原書 1902 年）[3] が数学者・林鶴一 (1873–1935) の手で訳出され，さらにカントや新カント派に依拠して独自の科学哲学・数理哲学を構築していた哲学者・田辺元 (1885–1962) によって

[2] 日本における論理分析系科学哲学の拠点のひとつは慶應義塾大学であり，沢田允茂 (1916–2006)，大出晁 (1924–2005) らがその中心であった．現在は西脇与作 (1947–)，岡田光弘 (1954–) の各教授がこの伝統を担っている．東京大学科学史科学哲学研究室では大森荘蔵 (1921–97) らが分析哲学を独自に展開した一方で，廣松渉 (1933–94) がマッハの実証主義を紹介，村上陽一郎 (1936–) らによる新科学哲学や科学社会学などの研究がおこなわれた．

[3] Henri Poincaré, *La science et l'hypothèse*, Paris: Flammarion, 1902.『科学と臆説』（林鶴一訳），大倉書店，1909 年．『科学と仮説』（河野伊三郎訳），岩波文庫，1938 年．

1916年に『科学の価値』(原書1905年)[4] が訳されて以降，ポアンカレの主要著作の大部分が邦訳紹介されたことは，戦前におけるほぼ唯一の例外であろう．西田幾多郎(1870–1945)や三木清(1897–1945)など京都系統の哲学者の科学論的著作にも，あるいは1932年（昭和7年）に戸坂潤(1900–45)，三枝博音(1892–1963)，岡邦雄(1890–1971)らによって設立され戦前日本の科学論研究を担った重要な組織である「唯物論研究会」の思想活動においても，フランスの科学論が積極的に参照された形跡は見出されない．科学哲学界ではフランス科学認識論の研究は一貫してマイナーであり，また，広い意味でのフランス哲学界内部でも――日本ではフランス思想の研究は伝統的にしばしばフランス文学研究者が担ってきたが，かれらの仕事のなかでも――この分野が積極的に研究されたことは，戦前から戦後にかけて，例外的な少数の事態にとどまっている．我が国にフランスの科学認識論が本格的に翻訳紹介されたのは1970年代以降，そして――構造主義・ポストモダニズムの流行のなかでフーコーが特権的な位置を占めたことを別として――思想界で積極的な議論の対象となったのは1990年代以降といってよい．後述のように，日本におけるフランス系科学論にとっての記念碑的研究書，金森修『フランス科学認識論の系譜』（勁草書房）の刊行は1994年のことであった．

日本の論者によるフランス系科学論の独自の展開については第10節で論ずる．そして，今後に向けてのさらなる展開の可能性を第11節で探る．以下，第3節から第9節は事実上，日本におけるフランス・エピステモロジー文献の出版史のような，いくぶん列記的な記述となる．

3.　バシュラール

フランス系の科学認識論のなかで，著作の質・量，後代への影響の大き

[4] Poincaré, *La valeur de la science*, Paris: Flammarion, 1905.『科學の價値』（田邊元訳），岩波書店，1916年；岩波文庫，1927年．『科学の価値』（吉田洋一訳），岩波文庫，1977年．

さという点で最大の思想家はガストン・バシュラールであろう．だから，これから順次みてゆく他のエピステモローグたちにも増して，バシュラールの受容史を詳しく検討しよう．バシュラールには科学認識論と詩論の両系統の著作がある．両者の区別は彼のなかで一応明確だが，ときにそれらを交錯させるような記述・著作がみられる．だからここでも認識論の書物だけの受容を論ずるわけにはいかず，詩論についても目を配ることにする．

バシュラールの名前が最初に日本に紹介された時期を特定することは困難だが，九鬼周造 (1888–1941) が 1931 年（昭和 6 年）から 1935 年（昭和 10 年）頃の京都大学におけるフランス哲学講義で，すでにバシュラールに言及していることが彼の講義ノート[5] で確認できる．1933 年（昭和 8 年）には田辺門下の河野與一[6] (1896–1984) が『岩波講座　哲學』[7] 所収の「現代佛蘭西哲學」[8] という小論のなかでバシュラールの認識論を的確に紹介している．おそらくこのあたりが最初期の紹介になるだろう．欧州の状況をほとんどリアルタイムで把握し，それに的確な吟味を加えている

[5] 九鬼周造『現代フランス哲学講義』，岩波書店，1957 年．これは九鬼自身の手になる講義草稿ノートを澤瀉久敬（本稿第 10 節参照）が校訂したものである．

[6] 哲学者，仏文学者，翻訳家．東京帝国大学数学科に学び，哲学科に転じて卒業．東北帝大教授．訳書はライプニッツ『単子論』（岩波書店，1928 年），『アミエルの日記』（全 8 巻，岩波文庫，1935–41 年），『プルターク英雄伝』（全 12 巻，岩波文庫，1952–56 年），ベルクソン『思想と動くもの』（全 3 巻，岩波文庫，1952–55 年）ほか多言語にわたってきわめて膨大であり，いまなお重要な古典的作品ばかりである．岩波書店顧問として，多くの翻訳書を監修．生前の単著は『学問の曲り角』（岩波書店，1958 年）のみだが，これは十数カ国の言語を能くし，数学・哲学・文学・歴史と百学に通じた河野ならではの博雅なエッセイとして傑作である．

[7] 西田幾多郎の指揮のもと岩波書店が 1931–33 年に刊行した叢書．岩波からは，この西田版を第 1 期として，その後，第 2 期（務台理作ほか編『岩波講座　哲学』，全 18 巻別巻 1，1967–69 年），第 3 期（大森荘蔵ほか編『新・岩波講座哲学』，全 16 巻，1985–86 年），第 4 期（飯田隆ほか編『岩波講座　哲学』，全 15 巻，2008 年–）が刊行されている．いずれも特色ある優れた企画だが，西田版の目配りの広さ，収録論文の質の高さは現在読んでも瞠目すべきものがある．

[8]『岩波講座　哲學』第 5 巻（岩波書店，1933 年）所収．

彼らの仕事には驚かされる．バシュラールの著作そのものが翻訳されたのはかなり遅く1960年代に入ってからで，当初は詩論ないしは文学研究の著作が日本語に移された．最初に日本語訳されたバシュラールの単行本は『ロートレアモンの世界』（原書1939年）で[9]，仏文学者・詩人の平井照敏(1931–2003)の訳により詩の専門出版社である思潮社から1965年に刊行されている．これはバシュラールの文藝批評デビュー作だ．次いで邦訳されたのが，バシュラールの遺作『蝋燭の焔』（原書1961年）で，訳者は仏文学者・詩人の渋沢孝輔(1930–98)，書肆はヨーロッパの異端思想・異端文学を当時盛んに翻訳出版していた現代思潮社．最初の詩論と最後の詩論が立て続けに邦訳された形になる．バシュラールのテーマ批評と呼ばれる文学研究の方法は，ロートレアモン論よりも，『水と夢』[10]，『空と夢』[11]，『大地と意志の夢想』[12]，『大地と休息の夢想』[13]，そして最後の『蝋燭の焔』[14] で顕著にあらわれる．これら〈物質の詩学〉連作は，すべて1960年代末から70年代初頭に翻訳刊行されている．バシュラールがこれらの作品の原書を刊行したのは第二次大戦のさなかから終戦直後，そして我が国で翻訳されたのが学生運動の時期――全共闘の出現から内ゲバの横行する党派闘争に至る頃――であることは興味深い．〈水に濡れた女の髪〉やら〈川の水と月の恋愛〉やらを語る夢想的な詩論が，欧州では戦禍

---

[9] Gaston Bachelard, *Lautréamont*, Paris: Corti, 1939.『ロートレアモンの世界』（平井照敏訳），思潮社，1965年.

[10] Bachelard, *L'eau et les rêves*, Paris: Corti, 1942.『水と夢』（小浜俊郎・桜木泰行訳），国文社，1969年.『水と夢』（及川馥訳），法政大学出版局，2008年.

[11] Bachelard, *L'air et les songes*, Paris: Corti, 1943.『空と夢』（宇佐見英治訳），法政大学出版局，叢書・ウニベルシタス，1968年.

[12] Bachelard, *La terre et les rêveries de la volonté*, Paris: Corti, 1948.『大地と意志の夢想』（及川馥訳），思潮社，1972年.

[13] Bachelard, *La terre et les rêveries du repos*, Paris: Corti, 1948.『大地と休息の夢想』（饗庭孝男訳），思潮社，1970年.

[14] Bachelard, *La flamme d'une chandelle*, Paris: P.U.F., 1961.『蝋燭の焔』（渋沢孝輔訳），現代思潮社，1966年.

の直中に読まれ，我が国では疾風怒濤の“政治の季節”に読まれたのだ．物質の詩学は，文学テクストのなかに現れる物質（元素）のイマージュを，その元素の象徴的な性質（水ならば「流れる」「冷たい」「透明」，火ならば「燃える」「熱い」「上に向かう」など）に沿った働きを担うものとして詩や物語のなかでどのように機能しているかを分析し，そのテクストを読み解く作法であり，このような方法による批評はテーマ批評と呼ばれる．テーマ批評は 1970 年代から 80 年代にかけて日本の文学研究・文藝批評に多大な影響を与えた．この時代を代表する批評家・蓮實重彦[15] (1936–) は，バシュラールやその流れを汲むリシャール[16] (Jean-Pierre Richard, 1922–) の方法をもちいて『夏目漱石論』（筑摩書房，1979 年），『映像の詩学』（筑摩書房，1979 年），『監督・小津安二郎』（筑摩書房，1983 年）などの文藝批評・映画批評をものした．蓮實は，たとえば漱石の小説で人が出会う直前には必ず〈雨が降る〉ということを指摘したり，あるいは映画のなかの人物が〈階段をのぼる〉とか，画面にあらわれる〈円形の物体〉といったイマージュの網羅と類型化によって，物語（ストーリー）読解とは異なる方法で小説や映画を評してみせる．また，『大地と休息の夢想』の訳者であった仏文学者・批評家の饗庭孝男 (1930–) の作品，とくに『石と光の思想』（勁草書房，1971 年）や『想像力の風景』（泰流社，1976 年）などが物質論的な語り口でヨーロッパ文明や文学テクストを評する手つきは，明確にバシュラール的なものである．蓮實や饗庭がこの時代の〈表〉の文学史を代表する批評家だとすれば，〈裏〉の文学史のなかに位置づけ

[15] 仏文学者，文藝評論家，映画評論家，東京大学元総長．リシャールについて直接言及しているのは『批評 あるいは仮死の祭典』（せりか書房，1974 年），バシュラール=リシャール的なテーマ批評の方法をめぐっては『「赤」の誘惑』（新潮社，2007 年）を参照．

[16] フランスの文藝批評家，文学研究者．とくにマラルメを専門とし，テマティスムの方法をとる文学批評の一派〈新批評（ヌーヴェル・クリティック）〉の代表的批評家．主著『マラルメの想像的宇宙』（*L'univers imaginaire de Mallarmé*, Paris: Seuil, 1961. 田中成和訳，水声社，2004 年）．

られるであろう澁澤龍彦[17] (1928–87) もまたバシュラールの詩論——主として二冊の大地論と『空間の詩学』——に依拠して『胡桃の中の世界』（青土社，1974年）という博物的エッセイを書き，或る種のオブジェを愛でることがそのまま批評になり文学になるという驚きを我が国の読書界に与えた．バシュラールの詩論系統の著作を中心に論じたモノグラフとしては，バシュラールの中心的訳者・及川馥の『バシュラールの詩学』（法政大学出版局，1989年）および『原初からの問い——バシュラール論考』（同，2006年），ほかに松岡達也『バシュラールの世界』（名古屋大学出版会，1984年）があり，翻訳書としてはピエール・キエ『バシュラールの思想』（篠沢秀夫訳，大修館書店，1976年）[18] がある．

バシュラールの認識論系統の著作で最初に日本語となったのは，前田耕作の訳でせりか書房から1969年3月に上梓された『火の精神分析』（原書1938年）[19] である．もっともこれは，火の概念史とも火のイマージュを分析した文学研究とも言える，科学論／詩論のはざまに位置する書物で，我が国では科学史・科学認識論的な関心というよりは，文学研究・神話学といった文脈で読まれたという印象が強い．訳者の前田耕作 (1933–) は文化人類学者である．1975年に邦訳された『科学的精神の形成』（原書1938年）は[20]，現代の見地からみれば認識論的誤謬となる理論を科学史のなかから収集し分析するという歴史的認識論の書物だが，どちらかといえば奇想的なイマージュの博物誌として，文学的関心にこたえる形で日本語の書物となったようである．中心となった訳者の及川馥 (1932–) は仏文学者・詩人．及川はバシュラールの詩論の研究者として長らく中心的な

[17] 仏文学者，作家．サド (Marquis de Sade, 1740–1814) の紹介者として知られる．主著『夢の宇宙誌』（美術出版社，1964年）など．

[18] Pierre Quillet, *Bachelard. Présentation, Choix de Textes, Lithographie*, Paris: Seghers, 1964.

[19] Bachelard, *La psychanalyse du feu*, Paris: Gallimard, 1938.

[20] Bachelard, *La formation de l'esprit scientifique*, Paris: Vrin, 1938.『科学的精神の形成』（及川馥・小井戸光彦訳），国文社，1975年．

存在であり，のちにバシュラールの直系といってよいミシェル・セールの著作も旺盛に翻訳紹介することになる（先述のとおり二冊の重要なバシュラール論の著者でもある）.

『火の精神分析』の日本語訳刊行と同じ 1969 年の 12 月には，フランス哲学研究者・掛下栄一郎 (1923–) の手で『瞬間と持続』（原書 1932 年）[21] が紀伊國屋書店から邦訳刊行されている．この著作は，ベルクソンが〈持続〉に時間の本質を見出すことに反論し，〈瞬間〉にこそそれを認める哲学的時間論で，とくに藝術創造における時間の問題が中心的に扱われる．本書はバシュラールの著作群のなかで科学論にも詩論にも分類できない地味な作品であるが，バシュラール受容の比較的初期に邦訳されていたことは興味深い．瞬間のうちに時間をとらえる構想は，のちの『持続の弁証法』（原書 1936 年）[22] へと引き継がれ，そこでは持続的時間を瞬間の連なりからなる律動（リトム）とみなし，それを律動分析（リトムアナリーズ）によって捉えるという興味深い議論がなされている．『持続の弁証法』もまた掛下栄一郎によって日本語の書物（国文社，1976 年）となっている．

1970 年代にはバシュラールの科学認識論における主要著作『新しい科学的精神』[23]，『原子と直観』[24]，『否定の哲学』[25] などが邦訳され，1982 年には彼の博士論文（主論文）『近似的認識試論』が及川馥・片山洋之介・豊田彰の手で渾身の邦訳書に仕上げられる．訳者の 3 人は訳書刊行当時，茨城大学の同僚であり，片山はその後，倫理学分野で活躍しフランス・エピステモロジー系統の仕事からは遠ざかるが，フランス語に堪能な物理学者の豊田彰 (1936–) は，及川と並んでセールの中心的紹介者として，さら

[21] Bachelard, *L'intuition de l'instant*, Paris: Stock, 1932.
[22] Bachelard, *La dialectique de la durée*, Paris: P.U.F., 1936.
[23] Bachelard, *Le nouvel esprit scientifique*, Paris: P.U.F., 1938.『新しい科学的精神』（関根克彦訳），中央公論社，1976 年．ちくま学芸文庫，2002 年.
[24] Bachelard, *Les intuitions atomistiques*, Paris: Boivin & Cie, 1933.『原子と直観』（豊田彰訳），国文社，1977 年.
[25] Bachelard, *La philosophie du non*, Paris: P.U.F., 1940.『否定の哲学』（中村雄二郎・遠山博雄訳），白水社，1974 年.

に科学史・科学論分野の翻訳者として現在に至るまで活躍している．バシュラールの翻訳紹介は，このように1970年代以降，認識論分野の著作についてもかなりの程度進むが，バシュラールの認識論について検討を加えた研究書，あるいはバシュラール的な方法を用いて具体的な科学史的材料をもとに認識論を展開した仕事はほぼ皆無の状態が続く．

状況が変わるのは1990年代になってからである．ポストモダニズムの喧騒いまだ覚めやらぬころ『適応合理主義』（原書1949年）[26] をひっそりと日本語に訳していた科学思想史研究者・金森修(1954–)がバシュラールの詩論と認識論の両面にわたって網羅的かつ明快に論じた著作『バシュラール――科学と詩』（講談社，「現代思想の冒険者たち」第5巻）を1996年に上梓する．バシュラールの科学論について議論を加えた単行本レヴェルの研究として，わが国最初のものである．

バシュラールについては，現時点で詩論のほぼ全作品が訳出されている一方，科学論の重要著作，たとえば熱学をめぐる認識論的検討である『ある物理問題の発展について――固体における熱伝導』[27]（博士論文副論文）や相対性理論の哲学『相対性の帰納的価値』[28]，あるいは一種の〈物質の哲学〉というべき『合理的唯物論』[29] などが未邦訳である．これらは極めて専門性の高い文献で，必ずしもテクストそのものの邦訳紹介が必要であるとは限らないが，今なお科学論研究の領域で参照されるに値する価値を有している．こうした文献群を踏まえた熱学なり相対性理論なり化学なりの認識論的研究は，我が国における〈フランス派〉科学論の重要な課題であり，それは必ず多くの実りをもたらすだろう．

---

[26] Bachelard, *Le rationalisme appliqué*, Paris: P.U.F., 1949.『適応合理主義』（金森修訳），国文社，1989年.

[27] Bachelard, *Étude sur l'évolution d'un problème de physique: a propagation thermique dans les solides*, Paris: Vrin, 1928.

[28] Bachelard, *La valeur inductive de la Relativité*, Paris: Vrin, 1929.

[29] Bachelard, *Le matérialisme rationnel*, Paris: P.U.F., 1953.

4. フーコー

フランスの認識論を語る上で，ミシェル・フーコーの名を避けて通ることはできまい．たんにエピステモローグという枠に収まらない多様な活躍をしたこの碩学は，当然ながら日本の思想界にも大きなインパクトを与え，現在もその余波は続いている．バシュラールと異なりフーコーの場合，その著作は存命中にほぼリアルタイムで日本に紹介されてきた．単著単行本レベルで最初に翻訳紹介されたのは『臨床医学の誕生』（原書 1963 年）で，1969 年に医師・著述家の神谷美恵子 (1914–79) の手で日本語に移され，みすず書房から刊行された．神谷は精神医学者で，ハンセン氏病患者の精神的ケアに尽力したことで知られる．文学方面では，同じく 1969 年に刊行されたフーコー，ソレルスほか共著『新しい小説・新しい詩』（岩崎力訳，竹内書店，AL 選書）が単行本レヴェルでのおそらく最初の紹介であろう．同書所収の「小説について（討論）」(«Débat sur le roman»),「詩について（討論）」(«Débat sur la poésie») がフーコーの参加した討論の採録である．この本はフランスの季刊文藝雑誌『テル・ケル』(*Tel Quel*) の第 17 号 (printemps, 1964) の特集部分（「新しい文学？」）を全訳した日本独自のものである[30].

[30] ここで当時の出版史に関することを少し補足しておくと，この版元の竹内書店は，その後，日本におけるポストモダニズム，あるいはいわゆるニューアカデミズム初期の知的源流となる多くの書物を出版し，さらに，謂わば〈プレ・ニューアカ〉の拠点というべき伝説の雑誌『パイデイア』を刊行することになる．その他，エピステモロジーとも密接するポスト構造主義・ポストモダニズム関係の論者を紹介する場となる雑誌としては，『エピステーメー』（朝日出版社），『現代思想』（青土社），『GS たのしい知識』（冬樹社／UPU），『海』（中央公論社）などを忘れるわけにはいかない．いずれの雑誌もフランス現代思想の語り口を表層的に移入するような，今日からすれば莫迦莫迦しい〈お祭り騒ぎ〉を担った面もあるわけだが，それにしても 1970–80 年代の出版文化の産物として，我が国の文化史に残る実りであるといってよいだろう．そして，これらの雑誌に関わった出版人として，塙嘉彦，三浦雅士，中野幹隆，安原顯という名前を書き留めておこう．

論文レヴェルでフーコーを論ずるものが現れるのも，だいたい1960年代後半で，たとえば加藤精司「フーコーの言語論――思想史から見た言語」(『哲学雑誌』，第84巻［第756号］，1969年10月）などは最初期のものの一つであろう．1972年には雑誌『パイデイア』第11号（1972年春号，竹内書店）が「〈思想史〉を越えて――ミシェル・フーコー」という記念碑的な特集を組み，フーコーの論文を6本，あわせてデリダ(Jacques Derrida, 1930–2004) のフーコー論，ラカン (Jacques Lacan, 1901–81) へのインタヴュー，フーコー書誌を掲載する．1975年には朝日出版社から思想雑誌『エピステーメー』が創刊され[31]，創刊準備号の巻頭にはフーコーのテクスト「エピステーメーとアルケオロジー」[32] が掲載される．

その後，認識論的色彩の強い著作として，1970年代に『精神疾患と心理学』[33]，『言葉と物』[34]，『狂気の歴史』[35]，『監獄の誕生』[36]，『知の考古学』[37] など，いずれも原書刊行から比較的短期間のうちに邦訳されている[38]．

こうしてみるとフーコーの受容はバシュラールなどに較べると，いわば

---

31 この誌名は，言うまでもなくフーコーの歴史的認識論の中心概念〈エピステーメー〉から採られている．

32 Michel Foucault, «Réponse à une question», *Esprit*, no. 5, 1968.

33 Foucault, *Maladie mentale et psychologie*, Paris: P.U.F., 1962.『精神疾患と心理学』（神谷美恵子訳），みすず書房，1970年.

34 Foucault, *Les mots et les choses,* Paris: Gallimard, 1966.『言葉と物』（渡辺一民・佐々木明訳），新潮社，1974年.

35 Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris: Gallimard, 1972.『狂気の歴史』（田村俶訳），新潮社，1975年.

36 Foucault, *Surveiller et punir*, Paris: Gallimard, 1975.『監獄の誕生』（田村俶訳），新潮社，1977年.

37 Foucault, *L'archéologie du savoir*, Paris: Gallimard, 1969.『知の考古学』（中村雄二郎訳），河出書房新社，1975年.

38 そのほか『性の歴史』（*Histoire de la sexualité*, 3 vols, Paris: Gallimard, 1976–84. 渡辺守章／田村俶訳，全3巻，新潮社，1986–87年）など，フーコーについてはほぼすべての著作が邦訳されている．

「幸福」であったように思われるが，実際のところは必ずしもそう順調であったとは言いがたい．フーコーのレトリカルなフランス語は日本人を魅了した．彼の著作の大部分は（医学者の神谷や哲学者の中村雄二郎をのぞけば）文学研究者によって訳され，フーコーを研究する学者も当初は大部分が仏文学者であった．フーコー移入に尽力したかれらの功績はむろん大きいのだが，しかしフーコーの思想的・学問的な意味合いが後景に退き，その絢爛たる語り口（ばかり）が日本の研究者にインパクトを与えることになった要因の一端はかれらの独特な紹介の仕方にもあったと言わざるをえない．フーコーのレトリックを口真似して喜んでいるような稚拙な研究書が濫造されることになった．フーコーの歴史的認識論の方法を的確に紹介した上で正当に評価し，そしてそれを用いて認識論・歴史学・社会学などの作業を実践する研究が現れたのはフーコーの没後 1990 年代以降，あるいは 2000 年代に入ってからといってよい．あたかも万代の吟味に耐えてきた古典思想を訓詁学的に読むかのごとく崇拝の対象として「フーコーを読む」ことから，歴史的・思想的な対象を「フーコーのように読む」「フーコーを使って読む」ことへとようやくシフトしてきたのがこの 10 年ほどである（後述の重田園江，芹沢一也らの仕事を参照）．フーコーの思想が道具としてどれだけ使いでがあるのかを吟味していく作業がこの先 10 年ほどの課題であろう．

5. カンギレム

ときとして弟子のフーコーが出藍の誉れのように扱われてしまうカンギレムであるが，フランス系認識論の学者のなかでは，もっとも手堅い仕事をしている人物のひとりである．我が国でカンギレムに言及した最初期の文献として，医師・医学哲学者の中川米造 (1926–97) による論考「ジョルジュ・カンギレム」（1968 年）がある．この論文は日本におけるフランス哲学研究の第一人者・澤瀉久敬の編になる『現代フランス哲学』（雄

渾社，1968年）に収録されており，この論集には他にもブランシュヴィック論，バシュラール論など，フランス・エピステモロジー関係の重要な論文が収録されている．また，編者の澤瀉はのちに自身の古稀記念論文集『フランスの哲学』（全3巻，東京大学出版会，1975年）の第3巻序文でもカンギレムに言及している（澤瀉とその周辺の学者については第10節で述べる）．カンギレムは医学・生物学の哲学を主な活躍の場とした哲学者である．フランスのみならずひろく医学哲学の議論に大きな影響を及ぼした著作『正常と病理』（原書1943年）[39] の邦訳は比較的遅く，1987年，ピアジェ (Jean Piaget, 1896–1980) を専門とする心理学者の滝沢武久 (1931–) によってなされた．これがカンギレムの単行本レヴェルでの最初の邦訳である．その後，金森修の手で1988年に『反射概念の形成』（原書1955年）が[40]，1991年に論文集『科学史・科学哲学研究』（原書1968年）が[41]，それぞれ邦訳された．『科学史・科学哲学研究』の邦訳あとがきには，金森による詳細なカンギレム紹介・解説が付されている．2002年には『生命の認識』（原書1952年）[42] が，2006年には『生命科学の歴史』（原書1977年）[43] が，それぞれフランス哲学研究者・杉山吉弘 (1947–) の手で日本語となった．『生命の認識』の邦訳を杉山に勧めたのは哲学者・花田圭介 (1922–96) であったという．花田は後述するP.=M.シュールの訳者であり，パノフスキー (Erwin Panofsky, 1892–

[39] Georges Canguilhem, *Essai sur quelques problèmes concernant le normal et le pathologique*, Paris: P.U.F., 1943.『正常と病理』（滝沢武久訳），1987年，法政大学出版局.

[40] Canguilhem, *La formation du concept de réflexe aux XVIIe et XVIIIe siècles*, Paris: P.U.F., 1955.『反射概念の形成』（金森修訳），法政大学出版局，1988年.

[41] Canguilhem, *Études d'histoire et de philosophie des sciences*, Paris: Vrin, 1968.『科学史・科学哲学研究』（金森修監訳），法政大学出版局，1991年.

[42] Canguilhem, *La connaissance de la vie*, Paris: Hachette, 1952.『生命の認識』（杉山吉弘訳），法政大学出版局，2002年.

[43] Canguilhem, *Idéologie et rationalité dans l'histoire des sciences de la vie*, Paris: Vrin, 1977.『生命科学の歴史』（杉山吉弘訳），法政大学出版局，2006年.

1968) やカッシーラー (Ernst Cassirer, 1874–1945) などヴァールブルク (Aby Warburg, 1866–1929) 学派の精神史家を日本に紹介する初期の段階で功績のあった人物である.

カンギレムの主著はほとんどすべて 2000 年代までに邦訳されたわけだが，カンギレムについての研究書は単行本レヴェルでは皆無であり，カンギレム的な方法で歴史的認識論を展開した書物も少数にとどまっている.

6. ダゴニェ

フランソワ・ダゴニェもまた，フランスにおけるポスト・バシュラール世代の重要なエピステモローグである．著書は 60 冊を超え，2010 年 10 月現在，86 歳の高齢ながら，健筆をふるっている．バシュラールの弟子筋のなかで，カンギレムは比較的専門性が高く認識論学者と呼ぶことに殊更の留保を必要としない思想家であり，フーコーもまた広範な分野での知的活動をしながらも狂気・権力・統治・真理などいくつかの中心的主題にそれなりの収斂をみせるのに対して，ダゴニェは極めて領域横断的な思想家で，合理主義・主知主義・科学主義を基調とする思考であることは間違いないが，たんにエピステモローグとしてのみ捉えるには，良くも悪くもあまりに壮大な仕事をしている学者である．日本語に移された最初の著作は『具象空間の認識論』(金森修訳，法政大学出版局，1987 年．原書 1977 年)[44] であり，この訳書には訳者によってダゴニェの人物・来歴と思想のかなり詳細な解説が付されている．その後，いずれも 1990 年代に，〈表層〉をめぐる認識論ともテマティックな文化論とも呼びうる『面・表面・界面』[45]，生体統御をめぐる論考『バイオエシックス』[46]，さ

[44] François Dagognet, *Une épistémologie de l'espace concret*, Paris: Vrin, 1977.
[45] Dagognet, *Faces, surfaces, interfaces*, Paris: Vrin, 1982.『面・表面・界面』(金森修訳)，法政大学出版局，1990 年.
[46] Dagognet, *La maîtrise du vivant*, Paris: Hachette, 1988.『バイオエシックス』(金森修・松浦俊輔訳)，法政大学出版局，1992 年.

らに『イメージの哲学』[47]，『病気の哲学のために』[48] が邦訳されている．2010年にはダゴニェの主著と目しうる『ネオ唯物論』[49] が日本語の書物となった．かなり多くの著作が邦訳されている印象をもつが，先述の通り，いくぶん書き過ぎの感さえあるほどに多作なダゴニェの作品全体からすれば，日本語になったものはごく一部にすぎない．このほかに薬学の認識論[50] や，化学の周期表をめぐる論考[51] など重要な著作が未邦訳である．ダゴニェの哲学をトータルに論じたモノグラフは単行本レヴェルではいまだ我が国で書かれておらず，論文レヴェルで充実したダゴニェ論としては金森修「或る実証主義の帰趨――フランソワ・ダゴニェ試論」（金森修編『エピステモロジーの現在』，慶應義塾大学出版会，2008年所収）がほぼ唯一という状況にある．

7. セ　ー　ル

バシュラールの直系であり，もともとライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716) 研究からその学問的来歴をスタートした哲学者ミシェル・セールも，日本で旺盛な紹介がなされたフランス系エピステモローグの一人である．セールもまた多作な書き手で，1968年のデビュー作『ライプニッツのシステム』[52] 以来，現在までに約50冊の単著をものしている．日本語になっているのは，その約半数にあたる25冊．

---

[47] Dagognet, *Philosophie de l'image*, Paris: Vrin, 1984.『イメージの哲学』（水野浩二訳），法政大学出版局，1996年.

[48] Dagognet, *Pour une philosophie de la maladie*, Paris: Textuel, 1996.『病気の哲学のために』（金森修訳），産業図書，1998年.

[49] Dagognet, *Rematérialiser,* Paris: Vrin, 1985.『ネオ唯物論』（大小田重夫訳），法政大学出版局，2010年.

[50] Dagognet, *La raison et les remèdes*, Paris: P.U.F., 1964.

[51] Dagognet, *Tableaux et langages de la chimie*, Paris: Seuil, 1969.

[52] Michel Serres, *Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques*, 2 vols, Paris: P.U.F., 1968.『ライプニッツのシステム』（竹内信夫ほか訳），朝日出版社，1985年（抄訳）.

最初に邦訳されたのは上記のライプニッツ論（竹内信夫ほか訳，朝日出版社，1985 年〔抄訳〕）．セールは高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）で哲学・文学・数学の学位を得，彼が若き日の学問的情熱をささげたライプニッツその人のように，百学連関的（アンシクロペディック）な広がりをみせる知的世界を形成している思想家で，たんなるエピステモローグとはとても呼べないが，とくに科学認識論あるいは科学思想史の領域に属する仕事として重要な『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生――河川と乱流』[53] や『幾何学の起源』[54] のような書物，あるいは科学と文学のかかわりを論じた科学文化論というべき領域に属する『青春　ジュール・ヴェルヌ論』[55] や『火，そして霧の中の信号――ゾラ』[56] のような書物が邦訳されている．そのほか〈エルメス〉(*Hermès*) という総題をもつ連作エッセイ (1969–80)，バルザックの『サラジーヌ』を論じた『両性具有』[57]，感覚の哲学『五感』[58]，一種の仮想的空間論『アトラス』[59]，ローマ帝国を材料に歴史哲学を展開した『ローマ』[60] など，重要な著作を日本語で読むことができる．セールの書くものには良くも悪しくも詩的散文とでも呼ぶべき趣きがあり，とくに 1990 年代以降の著書を中心として，とりとめのないエッセイと読者の目にうつりかねない作品もあるが，日本語に訳されているものの多くは，思想書あるいは文化論的な書物として重要な著作が多く，これは訳者たちの目利きと

---

[53] Serres, *La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce*, Paris: Éditions de Minuit, 1977.『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』（豊田彰訳），法政大学出版局，1996 年.

[54] Serres, *Les origines de la géométrie*, Paris: Flammarion, 1993.『幾何学の起源』（豊田彰訳），法政大学出版局，2003 年.

[55] Serres, *Jouvences sur Jules Verne*, Paris: Éditions de Minuit, 1974.『青春　ジュール・ヴェルヌ論』（豊田彰訳），法政大学出版局，1993 年.

[56] Serres, *Feux et signaux de brume: Zola*, Paris: Grasset, 1975.『火，そして霧の中の信号――ゾラ』（寺田光徳訳），法政大学出版局，1988 年.

[57] Serres, *L'hermaphrodite*, Paris: Flammarion, 1987.

[58] Serres, *Les cinq sens*, Paris: Grasset, 1985.

[59] Serres, *Atlas*, Paris: Julliard, 1994.

[60] Serres, *Rome*, Paris: Grasset, 1983.

言うべきであろう．すでに述べたように，科学・哲学・文学など広範な領域を論じる百科全書的思想家であるセールは，その極度に装飾的な文体のゆえもあるのだろう，もともとフランスでも比較的孤立的な位置をしめる哲学者である．日本でも，翻訳こそ盛んになされてきたが，セールの知的影響のもとに展開された思考と呼ぶべきものがどのぐらい存在するのか測りかねるところがある．その著作『青春　ジュール・ヴェルヌ論』がヴェルヌ的文学世界を渦動のイマージュのうちに捉えていたように，セールの思想世界もまたあらゆる知識を無尽の渦へと呑みこみ，読者に眩暈を引き起こす．こういう種類の〈思想〉が読み手に与えるインパクトを，影響関係とか受容史という見方で捉えることにそもそも無理があるのだろう．また，セールの全作品をコーパスとして分析し，〈ミシェル・セール論〉というべきモノグラフを書くことも容易ではないはずだ．ひとまず日本語の単行本としては今のところ唯一，ライプニッツの影響下に出発した哲学者としてのセールという側面にほぼ限定しているとはいえ，とにかくも一冊を費やしてセール思想を論じ，西田幾多郎の思想などとも比較してみせた労作，清水高志の『セール，創造のモナド』（冬弓舎，2004年）があることを書き留めておこう．

8.　スタロバンスキー

スタロバンスキーはジュネーヴ大学を拠点とする文学研究の一派，〈新批評（ヌーヴェル・クリティック）〉の代表的人物であり，我が国では一般に文学史家・文藝批評家として知られている．だが，彼はたんなる文学研究者にとどまらない碩学であり，文藝批評と思想史（とくに医学思想史・科学思想史）を横断する独特の著作の書き手として，注目すべき思想家である．スタロバンスキー[61]の著作がはじめて日本語に訳されたのは1966年の『医学の歴

[61] Starobinskiの読み方は，スイスの発音だとスタロビンスキーとなるのが通例のようだが，我が国ではスタロビンスキー／スタロバンスキーが混在している．ここでは後者をとる．

史』(「図説＝科学の歴史」第 8 巻，大沼正則・道家達将訳，加茂儀一監修，恒文社．原書 1963 年)[62] である．つまり，当初は科学史家として紹介されたことになる．その後，1971 年にテマティスムの方法による文学批評の傑作『活きた眼』(原書 1961 年)[63] が日本語訳され，以降，〈活きた眼　第 2 巻〉にあたる『批評の関係』(原書 1970 年)[64]，18 世紀の藝術と思想を論じた『自由の創出』[65]，『フランス革命と芸術――1789 年 理性の標章』[66]，『病のうちなる治療薬』[67] など，今や 18 世紀学 (étude du XVIIIe Siècle) の古典となった名著，彼の代表作と目される『透明と障害――ルソーの世界』[68] や『モンテーニュは動く』[69]，『絵画をみるディドロ』[70] など，やはり 18 世紀の思想家を扱ったモノグラフ，さらには有名なウィルフォードの道化論[71] とほぼ同時期に仏語圏で書かれた道化研究として重要な『道化のような芸術家の肖像』(大岡信訳，新潮社，1975

---

62 Jean Starobinski, *Histoire de la médecine*, Lausanne: Rencontre and Erik Nitsche International, 1963.

63 Starobinski, *L'œil vivant*, Paris: Gallimard, 1961.『活きた眼』(大浜甫訳)，理想社，1971 年.

64 Starobinski, *La relation critique*, Paris: Gallimard, 1970.『批評の関係』(調佳智雄訳)，理想社，1973 年.

65 Starobinski, *L'invention de la liberté, 1700–1789*, Genève: Skira, 1964.『自由の創出』(小西嘉幸訳)，白水社，1982 年.

66 Starobinski, *1789, les emblèmes de la raison*, Paris: Flammarion, 1973.『フランス革命と芸術――1789 年 理性の標章』(井上堯裕訳)，法政大学出版局，1989 年.

67 Starobinski, *Le remède dans le mal*, Paris: Gallimard, 1989.『病のうちなる治療薬』(小池健男・川那部保明訳)，法政大学出版局，1993 年.

68 Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau: la transparence et l'obstacle*, Paris: Plon, 1957.『透明と障害――ルソーの世界』(山路昭訳)，みすず書房，1973 年.

69 Starobinski, *Montaigne en mouvement*, Paris: Gallimard, 1982.『モンテーニュは動く』(早水洋太郎訳)，みすず書房，1993 年.

70 Starobinski, *Diderot dans l'espace des peintres*, Paris: Réunion des musées nationaux, 1991.『絵画を見るディドロ』(小西嘉幸訳)，法政大学出版局，1995 年.

71 William Willeford, *The Fool and His Scepter*, Evanston, Ill.: Northwestern U.P., 1969.『道化と笏杖』(高山宏訳)，晶文社，1983 年.

年)[72]，その他にも『ソシュールのアナグラム』(金澤忠信訳，水声社，2006年)[73]，『オペラ，魅惑する女たち』(千葉文夫訳，みすず書房，2006年)[74]など，藝術・思想関係の著作の多くが日本語に訳されている．今年で90歳になるスタロバンスキーだが，1990年代以降も，否，2000年代に入ってもなお旺盛に筆をふるっている．近年は再び科学思想史的研究に接近しており，ニュートン (Isaac Newton, 1642–1727) の〈作用—反作用〉の概念を生物体の〈刺激—反応〉や政治史における〈革命—反動〉などへと縦横に読み替えた極めて冒険的な著作『作用と反作用』[75] を1999年に上梓しており，これは2004年に邦訳されている（井田尚訳，法政大学出版局）．スタロバンスキーがその著作のなかで披露する鮮やかな手つき，つまり文学・思想・科学の歴史，さらには政治史・社会史をも一つかみに扱い，そこに文学テクストの内在的な読解をかませる手法は，ほとんど彼の名人藝と呼ぶべきもので，容易な模倣を許さない．だから，著作がこれだけ邦訳されても，スタロバンスキー的な方法が展開された知的アクロバットと呼ぶべき精神史の書物——それが西欧の文化を対象としたものであれ日本その他のアジアの文化を扱うものであれ——が数多く書かれるという状況にないことを別段嘆くには及ぶまい．それでも，たとえばフーリエ (Charles Fourier, 1772–1837)，ピエール・ルルー (Pierre Leroux, 1797–1871)，ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828–1905) などを縦横に論じた空間論，篠田浩一郎 (1928–) の『空間のコスモロジー』(岩波書店，1981年）のような書物は，スタロバンスキーの影響下に書かれた傑作といってよいだろう．

---

[72] Starobinski, *Portrait de l'artiste en saltimbanque*, Genève: Skira, 1970.

[73] Starobinski, *Les mots sous les mots: les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris: Gallimard, 1971.

[74] Starobinski, *Les enchanteresses*, Paris: Seuil, 2005.

[75] Starobinski, *Action et réaction: vie et aventures d'un couple*, Paris: Seuil, 1999.

9. シュール

ピエール=マクシム・シュール (Pierre-Maxime Schuhl, 1902–80) はもともとプラトン研究を専門とする古典学者で，ソルボンヌの教授であった．主著は『プラトンとその時代の藝術』[76]，『ギリシア思想の形成』[77] である．だから，せまい意味でのエピステモローグとは呼べないのだが，バシュラールやカンギレムとは親交があり，フーコーのエコール・ノルマル入学および哲学教授資格試験の二度にわたって試問官をつとめている[78]．『機械と哲学』[79]，『想像力と驚異』[80] といった書物のなかでは科学的・技術的想像力をめぐる独特の議論をしている．こころみに『想像力と驚異』のページをめくれば，外科学の歴史，結晶体の美学，映画的想像力など，人間の想像的文化にかかわるさまざまな話題が無数の書物を博捜しつつ自由に論じられており，すぐれてバシュラール的な言語圏に近い書物であることがただちに了解される．邦訳されている著作は三作品あって，まず 1972 年に『機械と哲学』（原書 1968 年）が唯物論系の著述家・粟田賢三 (1900–87) の手で岩波新書の一冊として訳され，1983 年には美学者・谷川渥 (1948–) によって『想像力と驚異』（白水社．原書 1969 年）が邦訳されているほか，科学論に直接かかわる本ではないが，プラトン対話篇を「ミュートスがロゴスを延長しに訪れる」と評するようなきわめて詩的なプラトン論『プラトン 作品への案内』[81] が先述の花田圭介の翻訳（岩波書店，1985 年）によって読むことができる．シュールは我が国のプラトン研究者からはさほど評価されていないようであるが，澁澤龍彦のエッセ

[76] Pierre-Maxime Schuhl, *Platon et l'art de son temps*, Paris: Alcan, 1933.
[77] Schuhl, *Essai sur la formation de la pensée grecque*, Paris: Alcan, 1934.
[78] エリボン『ミシェル・フーコー伝』（田村俶訳），新潮社，1991 年，49 頁，66 頁.
[79] Schuhl, *Machinisme et philosophie*, Paris: Alcan, 1938.
[80] Schuhl, *L'imagination et le merveilleux*, Paris: Flammarion, 1969.
[81] Schuhl, *L'œuvre de Platon*, Paris: Hachette, 1954.

イ『胡桃の中の世界』（青土社，1974年）などはシュールの決定的な影響下に書かれた書物といってよいだろう．『想像力と驚異』の訳者・谷川渥の『幻想の地誌学』や『鏡と皮膚』といった文化史的エッセイにも，シュールの（そしてバシュラールの）語り口の反映を見出せる．参考文献や引用という形で言及されることこそ少ないが，驚異・想像力・科学幻想といった問題系に興味をもつ論者が必ず目を通している，いわば通好みの書物といった位置にシュールの作品はあるのだろう．

10.　日本のフランス派エピステモローグ

以上，日本におけるフランス系科学認識論の紹介・翻訳の状況を概観した．具体的な思想家の個別的紹介のほかに，フランス系科学認識論がとってきたようなスタイルで科学史・科学認識論を日本で独自に展開している思想家についても触れておこう．

まず，医学哲学者・澤瀉久敬(1904–95)の名をあげたい．日本でフランス哲学は大学のフランス文学科で研究されるという伝統があったが，澤瀉は哲学の領域でフランス思想の紹介につとめ，またそれを独自に展開して自身の哲学を築いた学者であった．田辺元・九鬼周三門下の彼はもともとメーヌ・ド・ビラン (Maine de Biran, 1766–1824) やベルクソン (Henri-Louis Bergson, 1859–1941) の哲学を専門としており，やがて医学哲学を構築するにいたった．主著『医学概論』（第一部，創元社，1945年；第二部，創元社，1949年；第三部，東京創元社，1959年）は田辺の著作『科学概論』（岩波書店，1922年）を念頭に置いたタイトルである．単著のほか多くの論集を編纂し，カンギレムやバシュラールについての造詣も深い．フーコーが活躍した頃，澤瀉はすでに高齢であったが，それでもなお同時代のフランス哲学の動向に注目しつづけ，たとえば彼の古稀記念論文集『フランスの哲学』（東京大学出版会，全3巻，1975年）では，第3巻の序文に，ブランシュヴィック，ロトマン，カヴァイエス，

バシュラール，カンギレム，フーコーなどの紹介がある．また，ベルクソン哲学の立場から自然科学を論じた著作として『科学入門――ベルグソンの立場に立つて』（角川新書，1955 年）がある．

坂本賢三 (1931–1991) の名前にも言及しておきたい．物理学を修めたのち哲学に転じた彼は，科学思想史・技術史の分野で大きな貢献をした．バシュラールなどのフランス系思想にも明るい坂本は，先述の澤瀉久敬編『現代フランス哲学』に「ガストン・バシュラール」という紹介的な論考を，また前掲の澤瀉古稀論文集『フランスの哲学』第 3 巻に「バシュラールにおける二元性の秘密」という論文を載せている．坂本は科学論研究者であるが，この二篇の論考はバシュラールの詩論をも議論の対象とし，科学論・詩論の双方を一つかみにバシュラール哲学を論じる優れたエッセイである．主著は『機械の現象学』（岩波書店・哲学叢書，1975 年），『科学思想史』（1984 年，岩波書店・岩波全書）．惜しむべきことに坂本は，1991 年に 60 歳という比較的若い年齢で亡くなっている．

中村雄二郎 (1925–) もまた日本の哲学界においてフランス哲学の研究をすすめ，独自の哲学を世に問うている学者のひとりである．すでに紹介したとおり，彼にはバシュラール，フーコーの翻訳もある．1990 年代には医学哲学の問題にコミットしており，フランス系の医学思想などをしばしば参照している．フランス系のバイオエシックスなどに言及した著作には『生と死のレッスン』（青土社，1999 年）がある．

バシュラールの項で述べたように，金森修の貢献はこの分野において最大である．金森は 1994 年に『フランス科学認識論の系譜』（勁草書房）で，フーコー，カンギレム，ダゴニェといったバシュラールの弟子筋にあたる認識論学者について論じている．これは日本におけるフランス科学認識論の受容にとって記念碑的な著作といってよい．その後も金森はフランス系科学論の現代的展開を多くの論者によって論じた編著『エピステモロジーの現在』（慶應義塾大学出版会，2008 年）や『科学思想史』（勁草書

房，2010 年）を刊行するなど，フランスの科学認識論を日本に紹介し，またそれに独自の検討を加えた研究書を上梓している．彼の仕事は近年，フランス系科学認識論の紹介から，むしろフランス的な方法を使って独自の医学思想史・医学哲学あるいは科学文化論を構築する方向にシフトしているようである．

社会科学分野で，フーコーの訓詁学や口真似ではなく，フーコーの方法をつかって同時代の，あるいは歴史的な対象を分析している若手研究者が数多く活躍している．社会思想史・現代社会論の領域で執筆している重田園江 (1968–) は，近年の日本での健康政策，監視社会，犯罪学などの動向をフーコー的な手つきで繊細に分析した論考を数多く世に問うている．主著は『フーコーの穴』（木鐸社，2003 年），『連帯の哲学 I』（勁草書房，2010 年）．社会学の分野では，芹沢一也 (1968–) の活躍にも注目したい．彼は「監視」や「狂気」の問題系，つまりフーコーの『監獄の誕生』あるいは『狂気の歴史』の系列を使って，同時代を分析する作業を続けている．主著は『狂気と犯罪』（講談社，2005 年），『犯罪不安社会』（浜井浩一との共著，光文社新書，2006 年），『時代がつくる「狂気」』（朝日新聞出版，2007 年），『フーコーの後で』（高桑和巳との共編著，慶應義塾大学出版会，2007 年）など．

11.　フランス科学認識論の今後

巨人の肩の上で

フランス（語圏）独自の認識論，つまり英米科学哲学とは一定の距離を置いてフランスで展開された認識論を仏語の綴り字で épistémologie と呼ぶならば，まずこの分野はフランスで現在どのような状態にあるのだろうか．一言でいうならば，それは静かな潮流であることは否定しがたいが，それでも一定の知的なディシプリンとして独自の展開をみせている，といえるだろう．そして，近年では英米哲学に対する独自性から，フラン

スのエピステモローグたち自身が自らの仕事をフランス科学認識論 (épistémologie française) と呼ぶことも多くなっているようである．たとえば 2000 年代には，当該分野の網羅的な論集としてビトボル & ガイヨン編『フランス科学認識論』(Michel Bitbol et Jean Gayon, *L'épistémologie française 1830–1970*, Paris: P.U.F., 2006)，そしてヴュナンビュルジェ『バシュラールとフランス科学認識論』(Jean-Jacques Wunenburger, *Bachelard et l'épistémologie française*, Paris: P. U. F., 2003) が刊行されている．たが，全世界的な科学哲学の動向をみるならば，フランス科学認識論が決してメジャーな一派でないことは間違いないようである．

世界の科学哲学界で比較的マイナーな位置にあるということは，フランス科学認識論が思想的・文化的に価値をもっていないことをいささかも意味しない．それが担われている言語（つまりフランス語）の使用者人口，あるいは 9.11 テロル以降の人文・社会科学全体の布置など，さまざまな事情があって，現在のフランス科学認識論の位置がある．英米科学哲学とは違った特色をもち，それと相補的に科学の哲学を構成する一部として，フランス科学認識論は今後も価値をもち続けるだろう．そして，フランスの認識論学者たちがとってきたようなスタイルがフランス語圏以外で展開してはならない理由はない．フランス語に堪能でコレージュ・ド・フランスでも教えたカナダの哲学者イアン・ハッキング (Ian Hacking, 1936–) の仕事などは，バシュラールやフーコーの認識論的科学史／科学史的認識論がフランス語圏外で展開した好例である．だから，フランス科学認識論が我が国でこの先独自の実りを結んでゆく可能性も大いにあるだろう．今後の課題として，まず充分に紹介が尽くされたフーコーのような思想家については，その思想家についての研究というよりは，その思想家の方法を用いた独自の研究を展開すること（つまり，フーコーで言えば，「フーコーを読む」ことから「フーコーのように読む」ことへ)，そしてバシュ

ラールなどいまだその仕事の全貌の解明が不充分な思想家については未邦訳の重要著作の訳出・分析などが急務である．そうした上で，かれら〈巨人たち〉の伝統に拠りつつ，我が国でフランス系科学認識論がいっそう豊かに展開するためには，どのような方向性をめざすべきか．〈博識の系譜〉と〈想像的なもの〉という二つの視点を提起したい．

博識の系譜

本稿で名前をとりあげた思想家たちの多くに対して，「たんにエピステモローグと呼ぶにはあまりに幅広い」という類の限定をつけつつ言及したことを想起されたい．カンギレムのような（そして日本ではほとんど未紹介だが，カヴァイエスやデュエムのような）認識論の専門研究者としての堅実な学者もいるわけだが，ここに言及した思想家たちは，ヴォルテール (Voltaire, 1694–1778) やディドロ (Denis Diderot, 1713–84) のような18世紀の啓蒙思想家（フィロゾーフ）以来の〈博識の系譜〉というべきものを担う文人 (homme de lettres) であると言ってよい．かれらは多くの言語に通じ，しばしば複数の学位をもち，人文・社会・自然のあらゆる学問領域を容易く越境する．それはかれらの天性の超人的知性と膨大な文献の博捜を可能にする強靭な意志の力による名人藝なのか．むろん，それもあろう．誰もがかれらのような知的アクロバットを能くするわけではない．だが，かれらは何も数十年に一人の天才ではない．たかだか20世紀のフランスをみるだけでも，フーコーが，セールが，スタロバンスキーがいる．エピステモローグという縛りを外すなら，フランスにはヴァレリー (Paul Valéry, 1871–1945) が，サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905–80) が，カイヨワ (Roger Caillois, 1913–78) がいた．そして同時期のドイツ語圏には，やはり博覧強記の哲学者カッシーラーがあり，美術史家ヴァールブルクがあった．英語圏にはアーサー・ラヴジョイ (Arthur Oncken Lovejoy, 1873–1962)，マージョリー・ニコルソン (Marjorie Hope Nicolson,

1894–1981)，そしてジョージ・スタイナー (George Steiner, 1929–)，バーバラ・スタフォード (Barbara Maria Stafford) やロレーヌ・ダストン (Lorraine Daston) がいる．我が国には下村寅太郎 (1902–95)，林達夫 (1896–1984) がいた．一つの観念を論じるとき，それに関わる通時的系譜を遺漏なく渉猟し，また或る時代の一つの領域に現れた観念をその時代の別の領域(ジャンル)に見出す脱領域的な知性．それを，フーコーやスタロバンスキーのような華麗な手さばきには遠く及ばなくとも，われわれはわれわれなりに身につけることができるはずだ．むろん，万学の体系化という野望の果てに狂気という不幸な結末を招いたオーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798–1857) の名を 19 世紀の思想史に，あるいは図書館のあらゆる書物を渉猟するブヴァールとペキュシェという二人の読書家をめぐる悲喜劇をフローベールの小説のうちに，われわれは見出すであろう[82]．なにもそんな極端なことを言っているわけではない．例えばフーコーが生物学の黎明期の歴史を眺めるとき，ふと脇を見て，そこに経済学の誕生を認めたように，ただ一つの領域や対象だけにとらわれない知性と，それを可能にする博識．フランス科学認識論を独自に展開しようとするわれわれには，そうした博識の伝統に連なろうとする心意気が必要ではあるまいか．

想像的なもの

フランス科学認識論の現在の姿を決定づけた思想家バシュラールは，認識論の研究と同じほどの労力を詩的想像力論の研究に割いた．科学と文学をともに論じるという伝統が本稿で扱ったダゴニェ，セール，シュール，スタロバンスキーのほか，日本ではいまだ充分な紹介がなされていない論者としてエレーヌ・チュゼ (Hélène Tuzet, 1901–87)，フェルナン・アリン (Fernand Hallyn)，ヴュナンビュルジェ (Jean-Jacques Wunenburger,

[82] Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, 1881.『ブヴァールとペキュシェ』(鈴木健郎訳)，全 3 巻，岩波文庫，1954–55 年.

1946–) などによって担われている．また，フランス・ディジョンにあるガストン・バシュラール・センターの正式名称は「想像的なものと合理的なものの研究のためのガストン・バシュラール・センター (Centre Gaston Bachelard de recherches sur l'imaginaire et la rationalité)」である．つまり，知性の行使をめぐる学である認識論は，知性の外にあるもの，たとえば文学や美術といった想像力の産物に対峙しなければならない瞬間を必ず経験するということを，フランスのエピステモローグの少なくとも一部は強く意識しているのだ．日本では科学と文学をともに論じるなどというのは一種の離れ業であるかのように考えられがちである．だが，フランス独自の認識論の伝統をいっそう豊かに発展させようとすれば，〈科学と詩〉という問題系は決して避けられないであろう．われわれ日本のフランス派エピステモローグは，詩を読まなければならない．

科学認識論から科学文化論へ

〈博識の系譜〉に連なり，想像力の領域をもその射程に入れたエピステモロジーは，もはや科学認識論とは呼べないかもしれない．だが，それで何が問題であろうか[83]．科学認識論がその学問的アイデンティティの自己解体を目指し，自らを葬送しつつ，科学文化論 (la culturologie générale sur les sciences) と呼ぶべき新たな領域を目指す道．これこそが，もはや本国でも一時の勢いを失ったフランス科学認識論を東アジアの小国でなおも展開しようとするわれわれの歩むべき方向ではないだろうか．

[83] とはいえ，科学と科学外部の言説を往還し，隠喩を駆使して異なる領域間を縦横に結びつける思想的営みは「科学の濫用」（ソーカル＆ブリクモン）であり，「アナロジーの罠」（ジャック・ブーヴレス）に陥る危険があるという批判があったこと（ソーカル事件，サイエンス・ウォーズ）は記憶に留められるべきだろう．

謝　　辞

本稿執筆にあたってご教示を仰いだ金森修・東京大学大学院教授（フランス哲学・科学思想史）に心より御礼申し上げます.

※本稿の一部は 2009 年 2 月 25 日～26 日に慶應義塾大学三田キャンパスで行われた Japan-Korea Philosophy Student Forum: Between Keio University and Seoul National University における口頭発表 “French Epistemology and Its Actuality in Japan”（26 日発表）の英文草稿をもとにしている.